
青色図鑑

北本彩和

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青色図鑑

【Nコード】

N2185E

【作者名】

北本彩和

【あらすじ】

淡い淡いこの気持ちを、恋と呼んでもいいのでしょうか？高2になった鈴音は友達に連れて行かれた同好会で学校が似合わない先輩と出会う。自分の世界観をはっきりと持つ先輩に憧れて、二人だけの秘密の時間を持つようになるけれど卒業が近づいて…。

1（前書き）

この小説は全編を通し同性愛表現を含みます。

ただしプラトニックなので直接的なものや過激な表現はありません。同性愛に嫌悪感を持つ方と直接的な性的表現を望む方には不向きです。ほかにもっと素敵な小説を探して下さい。

以上をふまえてそれでも読んで下さる方は、稚拙ではありますがどうぞお楽しみ下さい。

私は告白された、らしかった。高一の学校行事で合宿中のこと。夏だった。

それが具体的にどこだったか、今となってはいまいちよくわからない。一年と半年という時間はそれを忘れさせるには十分な時間だった。

どこかの高原。高原という言葉には優雅なイメージがあるがこれがなかなか大変だった。主観的に言えば、高原というより山の中だった。山中にバスごと捨てられた気分。ここは現代の姥捨て山。私は、まだ十五才だったのに。

「吉田鈴音さんですよね！ …ワタシと、オトモダチになって下さい」

思考がフリーズした。もちろん動作も。常識的に考えて仕方のない反応だったと思う。

大嫌いな山登りを終えて、後は平地を歩くだけという休憩ポイントでのことだ。つまり、疲れ切っている上にお互いジャージ姿。紺色の学校ジャージの左胸には名札がアイロンでついている。私は山登りの途中岩で滑って転んで泥まみれ、嫌気がさしてやぶにらみ。一生山登りはしないと誓いを立てている最中。

よく声を掛けてくれたと思う。その女の子は。生まれてこのかた十五年、初めてこんなこと言われた。これはある種の告白なのですよね？ たぶん。

オトモダチから初めてくださいということですか。ナニを始める
というのですか。

生まれて初めてされた告白が同性って、どうなの？ てつきりそ
ういうことは女子校でしか起こらないのだと思ってたのに。スポー
ツ万能な少年みたいな女の子が言われるものだとはかり。

私に通っているのは共学の高校なのに。背は高いが運動はまるで
ダメな私なのに。

何故。

困惑していても事態は打開されない。会話はキャッチボール。投
げられたら投げ返せ！ 大暴投だろうと関係ない。

「お友達？ いいよ。名前教えてくれる？」

友達という言葉を、額面通り受け取った振りをした。和やかに会
話してから彼女は微妙な笑顔で去っていった。

教えてもらった名前を覚える予定は、最初からない。

「ねえ由ちゃん、なんで今の人、私のこと知ってたんだろ？」

一緒にいたくせに空気みたいに気配を消して知らん顔していた友
人に問う。

「鈴音めだってるのかもよ？」

「やだな、それ。あとさ、こういうことって、よくあることなの？
私が今まで遭遇しなかったただけで」

由がしばらく考えるように黙る。私は自分より背も低く、誕生日
も遅い彼女を見上げる気持ちで見つめる。期待の眼差し。実際この
友人、沢木由は優れもので、とりあえず私より物知りだった。

「確率の問題なんじゃない？ 私も初めて見たけど。そういう人も
いる時はいるよ」

「いるのか。そういうものなんだ」。次に今の人にあつたらどんな

顔してればいいんだろ？」

「別にフツーに。お友達なんですよ？　ところで顔見分けられるの？」

人の顔を覚えるのが苦手な私を知っている彼女が、ちょっといいわるな感じで笑う。

「今はまださすがに覚えてるけど、次会ったときに、顔覚えてる自信ない。由ちゃん覚えてる？」

もちろんと頷く彼女はやはり優れもの。

「一緒にいるときに会ったら、コッソリ教えて下さい」「了解」

そのまま二人で芝生に座り込んでいた。青々とした芝生の向こうに三角屋根。どうもお土産屋さんらしい。砂糖に群がる蟻みたいに紺色の群れが集まっている。

これからまた歩くのに荷物を増やす奴の気がしれない。なんだかのどか。

そのうち紺色が一人走ってきた。

「ソフトクリーム売ってた。すっごいおいしいよ」

「あー、それはいいねー」

「私も食べたい。暑いし」

ソフトクリームに誘われて、私たちも紺色の群れに加わった。

高原なだけあってソフトクリームはおいしかった。近くに牧場があるそう。普通に売っている物よりミルクっぽい味がした。今なら冷たくて甘いというだけでおいしく感じるけど。

合宿所に帰り日も暮れて、キャンプファイヤーをした。お決まりのキャンプファイヤーもちろんあった。ただし合宿所が狭すぎて、男子と女子は別々に合宿に来ることになっている。先生以外ここに男はいない。

女子だけでフォークダンス。不毛としか言いようがない。せめてマイムマイムだけにしておけばいいものをオクラホマミキサーまで背が高いから男子のパートを踊らされた。

笑い話にしかない。実行委員会にその意義を問いたい。学校に帰ったら、男子もフォークダンスを踊ったのか是非聞かないと。女子だけよりツライ光景だっただろうし。

その後はクラスごとに花火。最初は手持ち花火から。4本ぐらいずつ配られた。

そこら中が火薬臭くなる。不確かな光がその中でいくつも瞬く。甲高い笑い声と話し声で音が遠い。

みんなどうしてこんなに元気なんだろう？

ざわめきに囲まれる。自分の花火の燃える音が、握った手から細かい振動で聞こえてくる。

金色の火花、それに混ざって青い光。火花が出きった後、朱色の火が燃えた。バケツの水に入れると、シュンともキュウともつかない音がした。

肩を叩かれて振り返ると由がいた。まだ始めたばかりなのに、彼女は手ぶらだった。私は近くにいた人に残りの花火をあげて、由

について合宿所の中に入った。

「えっ！ いいの？ ありがとう鈴音さん」

花火を渡された人の反応。

仲が良いわけでもないクラスメイトは、たかが三本の花火に大げさに喜んで見せてくれた。

わざとらしい。

私は控えめに微笑んで、気にしないでと言ってその場を離れた。
先生に気づかれないようにそっと。

「集団行動って疲れる」

部屋の窓枠に腰掛けて由が言った。

この建物は老朽化が激しく、畳はじめじめして波打っている。踏むと沈む感触がわかる。そしてすわるとジャージにべったり畳表の残骸がくっついてくる。

「そうだね。こういう風に見てるだけの方がいいかも。今日はなんか、疲れた」

二階に上がっているせいで、すぐ近くなのに外の音が遠くに聞こえる。

「山登りもしたし、鈴音は告白もされちゃったもんね」

からかおうという魂胆が見えて、こちらから仕掛けることにした。
「どうする？ 今、二人きりだし、私が由ちゃんに、好きですとか言ったら」

「低調にお断りするー。好きな人いるし」
即答ですね。

「知ってる。由ちゃんホント好きだよね。告白とかしないの？」
「しない」

決意は固いようだ。

「鈴音こそ告白とかしないの？」

「誰に？」

「さあ？ それで昼間の子みたいに言うの」

「オトモダチになってくださいって？ 私、そういう言い方しないと思う。好きなら好きでハッキリさせたいし。でもその時になったら怖くなるかも。その前にさあ、相手女なの？」

「うん！ 鈴音そういうのありそうだもん」

「どこが！」

あんまりだーとむくれる私の頭を、由が小さい子にするみたいに撫でた。

「鈴音がフォークダンスした中に、あの子いたの気づいた？」

気がつかなかったと答えると、私らしいと言われた。その方が良かったんじゃないかと言われて、こういうことだかわからなかった。小さくなつて頭を撫でられる。

「もう終わったんだからいいじゃない？」

外の声が一段と大きくなる。窓の外に目を戻すと、大きい花火をしているのが見えた。地面から上に向かって火花が飛ぶ。

「噴水みたいだね」

「そうだね。そろそろ終わりになって、みんな上がってくるよ」

見上げるはずの花火を見下ろすのは不思議な感じだった。

「星は瞬いて見えても本当は、瞬いているんじゃないって知ってる？」

私とは逆に、由は空を見上げていた。

由は同じ所にいても、私とは違う物を見てる。いつもそんな気がする。

そのことに少しだけ懂れる。由が見ている景色は、たぶん一生私には見えない。

「星、きれい！ 空気がきれいなのかな？ で？ なんで？」

「空気の揺らぎが瞬いているように見せるんだって」

「へー初耳。よく知ってるね」

星の瞬く空は透明すぎて、揺らぎながらも宇宙の色が透けて見え
た。

きつと深海はあんな色をしている。底の測れない群青。

この合宿から一年と少し。今から半年近く前、秋。

その日のことは鮮明に覚えてる。私が初めて、空が青いことに不安を感じた日。

朝のニュースを見てこんな時でも空は青いのだなあとぼんやりと思った。

私はいつでもうすぼんやり。ハッキリなにかを思ったり、明確に言語化することを嫌う。だってそんなの怖い。想像でしかありえなかったこと。現実になったときどう反応するのが一番良いかわからない。きっとそれは私だけじゃない。

「365dayフルーツって書いて、オールデイフルーツって、どうかと思わない？」

オレンジがかったピンクのブリックパックを持って私が言う。

「閏年の時どうするんだろうね？」

私のピーチ系ミックスと色違いのグレープ系ミックス片手に早希が答える。

のんびりした昼休み。世界で何が起ころうとも、学校は変わらない。ここはある意味楽園で、同じ理由で隔離病棟。同じような学力の、同じ年の人が、一つの部屋に入って、同じような時間を過ごす。平等で均質な場所。

「二人ともそんなにのんびりしてていいの？」

「！ よくないかも」

由のことばにハッとなって早希が時計を見る。

「鈴音行こ！」

緩慢な動きで伸ばした私の手を掴んでひっぱる。

これから早希と私はお昼の会に行くことになっている。早希は由のことも誘ったが、由は興味がないらしい。私も参加したことはない。今日が初めて。お昼の会に入るかどうかはとても悩んでいた。正規の部活動ではない。にもかかわらず、活動内容がとてつもなくマジメなのだ。

会員みんなと同じ話を読み（小説も随筆もいろいろらしい）、毎週火曜日の昼休み、お弁当の後に集まって感想を話し合う。何が楽しいのかわからない。

早希は顧問をしている先生のことを好きで入ったそうだった。

しかし彼女は一人で行くのが嫌だった。

私は百円のジュスに買収された。

オールデイフルーツはおいしかった。

急いで飲み干して移動。行き先が図書館だから、飲みかけのジュースは持って行けない。ちょっともったいない。せつかくだから最後まで味わいたかった。いつも自分で買うのは、八十円の烏龍茶だから。

いちごオ・レのストローをくわえたまま、無言で由が手を振っていた。

図書館に行く聞いて、閲覧室に行くのかと思っていた。それ以外に入れる部屋があると思っていなかった。

この図書館を私は気に入っている。うるさいので昼休みには滅多に来ないが。いつも来るのは2時間目の休み時間か放課後。

第一希望でもなかったのに、この高校には入学前に見学に来ていた。受験した学校の中でここだけ。

図書館がそれだけで一つの建物になっていることに驚いた。中学校とはあまりにも違う。二階建てでエントランスが吹き抜け。一階の閲覧室にはソファがあることと、二階の閲覧室の天井がガラス張りになっていることにひどく感心した。

打ちっ放しのコンクリートの壁。ひどく現実的な灰色の素材なのに、吹き抜けの高い位置から光が射していてどことなく懐かしいような気分になる。その壁を片手で辿りながら階段を上った。

早希に連れて行かれた二階に、魔法みたいに忽然と扉が現れる。

「こんなところに部屋あった？」

「気づかないよね。ここいつも鍵掛かってるし、用事ないし」

いつもは鍵が掛かっていると一言いながら迷い無くノブを回してドアを開ける。

カーテンを閉めた部屋の中は電気が点いていた。天窓からの日光に慣れた目には暗く感じられた。

「ああ、いらっしやい」

読んでいた濃いクリーム色の文庫本から目を上げて女の人が出た。私は驚いてしまった。

驚いている自分がわからなくて、少し混乱。その女性からうつける、漠然とした違和感。

「こんにちはー。おそくなっちゃったかと思つて急いできたんですよ。みんなまだですね」

そうみたいと相づちを打ちながら、その人は私を観察していた。真つ黒な目が細かく動いている。だから私も遠慮なくその人を見た。

座っているから身長がどのくらいかちゃんとわからない。とりあえず私よりは小さい。それだけは確信できてちよつと悲しい。日常生活で自分より背の高い女性は、母親以外あまり見ない。遺伝の力は偉大らしかった。

顔もがとても小さい。髪を括っているせいで輪郭が強調されている。その人は長い髪をしている。最近見ないほど黒い、長い髪。後ろで一つに括っていたが、おろせば腰まで届くかもしれない。少しだけ波打つてツヤがない。

そこまで髪を伸ばすのは髪に拘りをもっているから。そうでなければ洗った後あの髪を毎回乾かすなんて苦行に耐えられるはずがない。相当時間がかかるはずだ。それなのに一目で分かるほど痛んでいる。この人は髪の手入れにはあまり熱心ではないということ。

明らかな矛盾。この人は何かがおかしいと思った。

こんなことだけで判断するのは早計かとも思う。
でもこの人はどこかアンバランスだ。

私は自分がまだ完全に大人ではないことを知っている。たぶん子どもに分類されるということも。目の前の人は自分と上にしろ下にしろ1才しか変わらないはずだ。なのに私は彼女を女性として捉えている。女の子ではなく。

私と彼女は何かが違う。

私たちがお互いを観察している間も、早希はずっと沈黙を埋める

ようにしゃべり続けている。早希はきつとこの人が苦手だ。苦手な人の前では、好きな人の前にいるのと同じで平静でいられない。正反対の気持ちなのに同じ反応。不思議なことに沈黙か饒舌か。

早希が饒舌になるタイプだったおかげで目の前の人が高木という苗字の先輩だとわかった。年上だとわかって納得。年下ではありえない。でも一年後に、自分がこんな風に大人っぽくなっている可能性もゼロだ。

「どうも、初めまして、2Bの吉田です。早希ちゃんにお昼の会の話を聞いて、参加したいなって思っ。これからよろしくお願いします」

高木先輩を早希が紹介してくれたところで自己紹介、明るい感じで笑って見せた。

敵意がないというアピール。できるなら好きになってもらいたい。この先輩が気になってしかたないから。

4 (後書き)

一言でいうと出会い編。これで主要登場人物全部でたかな。

「こちらこそよろしく。吉田さんのことは先週聞いていたから。…座ったら?」

先輩が早希のことをちらっと見ながら言う。それから私の笑顔に釣られて笑顔になって、はっとしたように無表情になって文庫本にすぐ視線を落とした。

どうも照れたらしい。笑いかけそうになったのが恥ずかしかったようだ。その様子は年相応でかわいく見えた。

進められたソファに座りながらやっとわかった。アンバランスの正体。

この人のセルフイメージが実際とやや離れすぎている。たぶんそういうことだ。

この人を私が大人っぽく思うのは、この人がそうだと信じているから。でもこの人は私が大人ではないのと同様に大人ではない。それを気づかないふりでやり過ごそうとしている。知っているのに。この人のアンバランスさは無理していることの歪みなのかもしれない。

重そうな遮光カーテンがきっちり閉められた、電気の点いた部屋。昼休みでにぎやかな教室と全く違う空気。ここは他の学校中のどの場所より少しだけ夜だ。わざわざ光も音も遮断して、周りの時間と離れたこの場所は彼女に一番似合う場所だと思った。

ほどなくして他のメンバーがやって来た。一年生が三人と先生。早希の好きな先生は格好いいとは思いい。

一学期の間は三年生があと二人来ていたそうだ。受験勉強を理由

に二人は来なくなったと後から早希が教えてくれた。

挨拶をして会の趣旨説明を聞いたら昼休みが終わってしまった。帰り際に先生がプリントの束をくれた。

「前半を来週までに読んできて下さい。来週はみんなで感想を話し合いますよう」

『舞姫』なぜこれ？ 去年までは国語の教科書に載っていた小説だそうだ。

5 (後書き)

短いですねえ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2185e/>

青色図鑑

2010年10月28日06時29分発行